美術教育の現場における版画教材の扱われ方：金沢市の小・中学校における版画教育

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今井, 治男, 向, 聡子, 山田, 一美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23384

美術教育の現場における版画教材の扱われ方
―金沢市の小・中学校における版画教育―

今井　治男・向　　聡子*・山田　一美

Using Print Art as Teaching Materials in Fine Art Classes : The Education of Print Art at Elementary and Junior High Schools in Kanazawa City

Haruo IMAI, Satoko MUKAI, Kazumi YAMADA

概　要

本研究は，金沢市内の小・中学校の現場で版画教育がどのように行われているか，その実態を学習指導要領や現場教師へのアンケート調査から把握し，その問題点をとらえ，新しい版画教育への視点を提言するものである。

現在世間には様々な版画が数多く出回っている。また大きな公募展などには「版画」という独立したジャンルがあり，絵画や彫刻などと並ぶ芸術の一分野としての地位を確立している。しかしそれにもかかわらず，一般に「版画」といって連想されるのは，人びとの身近な生活風景を描いた素朴な味わいを持つ，あの木版画のイメージであろう。「版画」のイメージは著しく限定されてしまっている。それは明らかに学校のなかで行われてきた版画教育の影響である。

本論では美術教育のなかの版画の実態をつかむべく，学習指導要領と現場の教師の声という２つの方向からアプローチした。

教育現場の指針となる学習指導要領における版画の扱われ方をつかむため，昭和53年と，平成元年の小学校，中学校指導書からそれぞれ版画に関する記述を抜き出しまとめてみた。その結果，低学年では紙版画，高学年からは木版画を中心とし，他の版種についてはほとんど触れられることのない，紙版，木版中心主義の指導傾向が見られた。またその見方は「版画」を「ものの形を写しとる」としてではなく，「絵の表現形式の１つ」としてとらえるものであった。

さらに本稿では実際に指導する立場である現場の教師が，どのような版画の指導を行ってきたかをつかむため，金沢市内の小・中学校の図工科，美術科担当の教師にアンケートを依頼し，その結果をまとめた。この調査からは，ほぼ学習指導要領の方針を反映した結果が見られ，東京都の公立小学校の実態調査と比較してみても大きな差は見られなかった。しかし同時に，そのような木版・紙版中心のスタイルが現在行き詰まりを見せており，版画教育自体が不活発になっているという問題点も浮かび上がってきた。

本論ではこうした版画教育の現状を踏まえ，版画教育を再び活性化させるため，「絵としての版画」という従来の視点から，版の原点である「ものの形を写しとる版」という視点への転換を提言する。

「絵としての」木版が版画教育の主流となっているのは，そもそも版画が「生活版画」として戦後の日本に導入され，それが教材として定着したところにある。しかし現在，描かれるべき「素朴な」生活風景はもはや身近にはなく，版画の魅力の１つであった複数性も，印刷技術の発達でかつてほど重要ではなくなった。さらに色鮮やかな印刷物も大量に出回り，「白黒の素朴な」木版画は，もはやかつてほど魅力的な教材ではなくなってしまったようである。

版画をいま一度魅力的な教材として活性化させるには，従来には見られなかった新しい視点から版画をとらえなおす必要がある。それが「ものの形を写しとる版画」という見方である。「絵としての版画」という見方のなかでこれまで忘れられがちであったが，これこそが版画の原点

*石川県鹿島郡鳥屋町立鳥屋中学校教諭

であったはずである。

版画を「ものの形を写しとる」こととして幅広くとらえなおせば，教材としての様々な展開がみえてくることと思われる。

版画は様々な可能性を持ったこれからの分野である。美術教育のなかでその魅力を十分に開花させていきたいものである。

はじめに

版画にはリトグラフ，シルクスクリーン，銅版画などといった多様な種類があるにもかかわらず，それらはあまり知られることなく，「版画」といえば木版画を指すと考える傾向が一般的である。

それは明らかに学校での版画教育が木版中心に行われてきた結果である。それらの木版画のイメージが版画全体のイメージを限定し，そのしばられたイメージが，現在の版画教育の停滞を招いているようである。

本稿においては，金沢市内の小・中学校における版画教材の扱われ方を調査することを通し，版画を新しい視点からとらえなおし，版画教育の可能性を検討することとする。

Ⅰ．美術教育の現場における版教材の扱われ方

この章では，教育の現場で「版画」がどのようにとらえられまた行われているか，その実態をつかむため，学習指導要領と，アンケート調査をもとに現場教師の声をとりあげた。

１．学習指導要領における版教材の扱われ方

この節は，現場での教育活動の指針となる，学習指導要領における版画に関する記述を調べることで，版画が美術教育の場でどのようにとらえられているかを知ることがねらいである。

ここ約10年の傾向をとらえるため，平成元年と昭和53年にそれぞれ改訂された小・中学校の指導要領をとりあげ，比較しながら考察を加えていく。

(1)　平成元年版指導要領での版画のとらえ方

＜表１＞，＜資料１＞は，平成元年発行の『指導書』から，版画に関する記述を取りだし，まとめたものである。

〈表１〉 小学校における版教材の扱われ方

学年	版教材の位置づけ	内　　容
1	「材料をもとにした造形遊び」の活動	「版にして写す」 ・材料をそのまま版にして写して遊ぶ
2	「表したいことを絵に表す」活動	「平易な版を作って表す」 ・版遊びから版で表す活動へ発展 ・簡単な紙版など
3	「表したいことを絵に表す」活動	「紙版などで表す」 ・紙版により表現の幅を広げる ＊他の版表現→前学年までの版表現の経験を発展させることが基本
4	「表したいことを絵に表す」活動 →「版表現は絵の表現形式の一つ」	「平易な木版など」 ・線彫りが中心 ・彫りと刷りの関係をつかむ ＊他の版表現→前学年までの紙版の発展
5	「表したいことを絵に表す」活動	「表したいことがよく表れるように・・・版などで表す」 ・見通しをもった木版での表し方を工夫する ＊他の版表現　前学年までの経験の工夫・発展 「表したい感じが表れるように・・・木版などによる表現の特徴を考えて表す」
6	「表したいことを絵に表す」活動	「表したいことがよく表れるように・・・版などで表す」 ・彫りながらも表したいことが表れるように工夫 ＊他の版表現→今までの経験のなかからとり上げ、深める 「表したい感じが表れるように・・・木版などによる表現を生かして表す」

〔文部省『小学校指導書図画工作編』（平成元年発行）をもとに作成〕

〈資料１〉 中学校における版教材の扱われ方

「……観察を基にした絵の……表現方法は，素描，水彩画，版画などから，……各学年の指導計画に応じて，表現意図に適切と思われるものを適宜選んで学習させる。……」（p.25）

〔文部省『中学校指導書美術編』（平成元年発行）より抜粋。なお下線は筆者による〕

＜表１＞の小学校について見てみると，低学年では「紙版画」が，第４学年からは「木版画」が中心に述べられている。低学年ではまだ手の力が弱く，彫刻刀を扱うのは難しい。紙版画なら扱うものは紙やはさみであり，工作の感覚に近いことからも，児童には親しみやすい教材であるといえる。４年生あたりから手の動きや巧みさが増すことから，木版画がこの時期にふさわしい教材としてとりいれられている。

しかし他の版表現においては，いずれの学年においても前学年までの経験，主に紙版を工夫，発展させるという程度で，具体的な版形式については述べられていない。このことから小学校の版画指導においては，紙版や木版を指導の中

心とする方針で，他の版表現のとり入れについてはあまり積極的ではないといえる。

次に版教材の位置づけについてみてみる。

版画は最初，材料をそのまま版にして写す，いわゆる「はんこ遊び」から始まっているが，途中で「絵の表現形式の１つ」としてとらえられるようになる。その転換が明確に述べられているのが第４学年である。「はんこ遊び」が材料に左右される偶然性，意外性を楽しむ活動であるのに対し，「絵」は表したいものを表現する意図的な活動であるという大きな違いがある。

絵の表現形式の１つとしての紙版や木版は，木や紙をなかだちとした間接表現であり，写実的な描写はできないが，独特の表現を生む。それを直接表現である水彩画などとともに経験させることにより，創造表現の幅を広げることがねらいとされている。

一方＜資料１＞の中学校においては，版画は絵画の表現方法の１つとして，素描，水彩画とともに挙げられているが，特に具体的な記述はなく，指導計画に応じて選ぶという形になっている。よって中学校における版画教育は，指導計画に応じ指導に適切と思われるときに選んで行えばよいのであって，逆に言えば特に適切でなければ行わなくても良いという，小学校に比べずいぶんと弱いものになっている。

(2)　昭和53年版指導要領での版画のとらえ方

前項のものが現在の版画教材の扱われ方を示すものだとすると，10年前の版画教育はどのようなものであったのか。何か大きな変化はみられるであろうか。昭和53年発行の『指導書』からまとめたものが＜表２＞，＜資料２＞である。

＜表２＞を概観してみると，低学年では「紙版画」，第４学年からは「木版画」中心という一見平成元年版と同じ形をとっている。しかしこちらの方は「改訂の趣旨」の項で紙版画と木版画を指導の中心とすることが明確に述べられており，全体の紙版，木版中心の傾向がより一層強いものとなっている。他の版表現について記述があるのは，第６学年の「ドライポイント」のみである。

内容については，絵とは別に版画についての

〈表２〉 小学校における版教材の扱われ方

学年	版教材の位置づけ	内　　容
1	「材料をもとにして、楽しく造形活動ができる」	「版にして表す」 ・はんこ遊び（版画として取り扱うのではない）
	「感じたことや考えたことを絵や立体で表す」活動	「平易な紙版で表す」 ・初歩的な版による表現の喜びを味わう
2	「材料をもとにして、楽しく造形活動ができる」	「版にして写す」 ・版の並べ方や材料を工夫して、簡単な版の作り方に及ぶこともさせてよい
	「感じたことや考えたことを絵や立体で表す」活動	「紙版で工夫して表す」
3	「見たことや想像したことを絵で表す」活動	「紙質の違いなどを生かして版をつくる」 ・台紙付き紙版を主に表すものの前後の関係などを考えてつくる
4	「見たことや想像したことを絵で表す」活動	「木版画で表す」 ・彫刻刀の扱い方を理解する ・彫りと刷りの関係を考える
5	「観察や想像をもとにして、絵で表す」活動	「見通しを立てて木版画で表す」 ・彫りあとの効果なども考えて版づくりをする
6	「観察や想像をもとにして、絵で表す」活動	「見通しを立てて木版画などで表す」 ・効果的な彫刻刀などの使い方、刷り方を工夫する ・他の版形式の経験をさせてもよい→ドライポイントなど

〔文部省『小学校指導書図画工作編』（昭和53年発行）をもとに作成〕

〈資料２〉 中学校における版教材の扱われ方

「……観察をもとにした絵の……表現方法は，素描，水彩画，版画などから，各学年の指導計画に応じて，その指導に適切と思われるものを適宜選んで学習させる……」（p. 23）

「……想像をもとにした絵の……表現方法は，素描，水彩画，版画などから，各学年とも指導計画に応じて，その指導に適切と思われるものを適宜選んで学習させる。」（p. 25）

〔文部省『中学校指導書美術編』（昭和53年発行）より抜粋。なお下線は筆者による〕

独立した項目があり，平成元年版より具体的な記述がされている。また指導する内容についても，たとえば「彫りあとの効果なども考えて」（第５学年）のように，平成元年版では「高度である」として取り上げていないような内容についても触れている。また対象とする学年についても，昭和53年版では紙版画が第１学年から既に取り上げられている。このようなことからも，全体として現在よりレベルの高いものが目指されていたと言えよう。

＜資料２＞の中学校においては，平成元年版

と同じく，版画は絵画の表現方法の１つとして素描，水彩画とともに挙げられているが，特に具体的な記述はなく，指導計画に応じて選ぶという形がとられている。

(3)　版画教育10年の推移

２つの指導要領を比較してみるかぎり，版画教育については，昭和53年版当時の方が平成元年版の現在より活発に行われていたようである。平成元年版指導書の図画工作科改訂の趣旨によると，今回の改訂では造形的な創造活動を一層重視することが求められている。“ものの形を写しとる”といういわば「材料をもとにした造形遊び」的要素が版画には十分にあるのにも関わらず，それを絵の表現形式の１つとしてとらえる見方にこだわってしまっているために，美術教育における版画は，ずいぶんと視野の狭いものになってしまっているのではないだろうか。

２．金沢地区の小・中学校における版画教育
～版画教育に関するアンケート調査より～

(1)　金沢地区での版画教育に関する実態調査

ａ．調査の目的

この調査は，現場の教師が版画に関してこれまでにどのような授業を行ってきたかを調べることにより，美術教育の現場における版画教育の実態と傾向を知ることがねらいである。

ｂ．調査の対象・時期・方法

平成７年８月９日に開かれた「教研」に参加した金沢市内の小・中学校の図工・美術科担当の教員を対象に調査用紙を配り，回答を依頼した。

「教研」とは教員組合主催の教員の自主的な研究発表の場であり，今回は図工・美術科の参加者約120名中，約50％にあたる64名の回答を得た。

ｃ．調査内容

次の４つの質問を設定し，それぞれ記入してもらった。

＜１＞小学校の学級担任，図工専科，中学校の美術科の区別

＜２＞いままでに版画の授業を行ったことがあるか

＜３＞これまでに行ったことのある版画の授業を，対象学年，版種（技法），題材名（テーマ）別にまとめ，授業において工夫した点，子どもの反応などを所感としてつけて，事例をあるだけ列記する。

＜４＞図工・美術教育における版画教育についての意見・感想

ｄ．調査の結果と考察

①回答数とその内訳

小学校図工専科	・・・・16
小学校学級担任	・・・・37
中学校美術科	・・・・11
総数	64

実施時期が夏休み中だったということもあり，総数64という少ない回答しか得られなかった。そのためこのアンケート全体の結果が，そのまま金沢市内の版画教育の実態を正確に反映しているとはいいがたいが，それでもおおよその傾向を把握することはできよう。

②版画指導の実施状況

◆これまでに版画の授業を行ったことが

ある	・・・・・・・・・・62 人
ない	・・・・・・・・・・ 2 人

学担，専科を問わず，実に97％もの教師が版画の授業を行ったことがあるという結果がでた。図工・美術教育の現場で，版画がよく浸透していることがわかる。

◆１人当たりが挙げた事例数の平均

小学校図工専科	・・・・3.3 事例
小学校学級担任	・・・・1.7 事例
中学校美術科	・・・・2.3 事例

「版画の授業を行ったことがある」と回答した62人のうち，１人あたりどのくらいの事例数を挙げたか，その平均を担任別にまとめたものである。版画の授業に関し，１人がどれだけの授業のバリエーションを持っているかを示すものである。

事例数の平均は図工専科がもっとも多く，以下中学校美術科，学級担任と続く。全体的に見れば１人当たり平均２～３例というところである。

図工専科の事例数が多いのは，図工科のみに

〈表3〉それぞれの学年でとりあげた版種とその事例数

版種＼校種		小学校			中学校				合計	
	学年	1・2	3・4	5・6	1	2	3	部活		
木版	単色	2	23	11	3				39	56
	一版多色		1	9	2	3	1		16	
	多版多色				1				1	
銅版	エッチング		1	1	1	1	1		5	7
	メゾチント								0	
	ドライポント			1	1				2	
ドライポイント（塩ビ板）				2		5	1		8	
シルクスクリーン					1	1	1	1	4	
ステンシル			1	7					8	
紙版画		35	13						48	
リトグラフ									0	
いも版		2							2	
その他		スチレン版画いも版＋紙版	石膏版				リノカット		4	

専念できるということ，多様な学年に対応しなければならないという理由が考えられよう。

③版教材における表現材料と表現方法

＜表3＞は挙げられた事例を，版種（技法）別，学年別にまとめたものである。数字は挙げられた事例数を表しており，授業でとりあげられる版種の傾向や，学年による傾向を示している。

全体として，紙版，木版の事例数が多い。最も伝統的なスタイルであるということや，低学年では紙版を中心に，高学年からは木版が中心に述べられている学習指導要領の影響が大きいと言える。このほか銅版やドライポイントの事例も，高学年や中学校において比較的多く見られる。また絵画としての版画という枠をこえ，デザイン教育の一環としてシルクスクリーンやステンシルがとり入れられていたり，混合技法や新しい素材を使った版画など，教師独自の発想が生かされているものも見られ，版画教育の新しい傾向を示すものとして興味深い。

④版教材におけるテーマの傾向

設問＜3＞より，挙げられた事例のなかの題材名（テーマ）をまとめると，次の3項目に大きく分類される。

A）生活を表現する題材

B）空想，物語の世界を表現する題材

C）写生的な題材

A）はいわゆる「生活版画」の流れをくむ，伝統的なテーマだといえよう。小学校の紙版，木版の事例に多く見られたテーマである。「遊んだこと」，「運動する友達」など，子どもに自分たちの身近な生活を見つめなおさせるとともに，版の上で「動き」をどのようにいきいきと表現させるかを，指導上の重要なポイントとしている例が目立った。

B）も小学校に多かったテーマである。豊かな色合いを生かした一版多色刷りや，ステンシルにより，空想の世界や想像上の生き物を表現する，あるいは民話や童話の世界を表現するというもので，絵画表現では得られない木版や紙版の効果を十分に生かしたテーマであるといえよう。またこのテーマには教師のセンスが光る実践が多くみられた。その具体例をいくつか挙げてみると，題材名，内容に目をひかれたもの

〈表４〉東京都公立小学校における版画の実施率

学　年	1	2	3	4	5	6	平均
実施率(%)	100.0	96.2	94.4	94.8	88.0	74.0	91.2

〔「図画工作科の指導内容の実態調査」東京都立教育研究所紀要p. 4より再構成して作成〕

〈表５〉東京都公立小学校における各分野の実施率の平均

分　野	描　画	版　画	彫　塑	デザイン・工　作	造　形遊　び	鑑　賞	共　同製　作
実施率(%)	100.0	91.2	92.2	100.0	88.2	63.9	28.9

〔「図画工作科の指導内容の実態調査」東京都立教育研究所紀要p. 5より再編成して作成〕

〈表６〉東京都公立小学校の版画の題材における表現材料と表現技法

学年／回数／材料・表現技法	1	2	3	4	5	6
	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)	回数(%)
1．紙　　版	90(93.8)	108(94.7)	77(81.9)	8(7.5)	3(3.1)	2(2.3)
2．木　　版	1(1.0)	0(0.0)	2(2.1)	82(76.6)	68(70.1)	46(52.9)
3．一版多色	1(1.0)	0(0.0)	0(0.0)	8(7.5)	12(12.4)	15(17.2)
4．多版多色	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.1)	2(2.3)
5．ドライポイント	0(0.0)	0(0.0)	6(6.4)	5(4.7)	2(2.1)	10(11.5)
6．エッチング	0(0.0)	0(0.0)	1(1.1)	0(0.0)	1(1.0)	2(2.3)
7．シルクスクリーン	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(2.1)	4(4.6)
8．ステンシル	0(0.0)	0(0.0)	3(3.2)	2(1.9)	5(5.2)	3(3.4)
9．その他	4(4.2)	6(5.3)	5(5.3)	2(1.9)	3(3.1)	3(3.4)
合　計	96(100.0)	114(100.0)	94(100.0)	107(100.0)	97(100.0)	87(100.0)

〔「図画工作科の指導内容の実態調査」東京都立教育研究所紀要p. 19より再編成して作成〕

として，「まもりがみたち（紙版）：紙以外の素材も扱い，１人１人の思いを入れたまもり神を表現させる」，「夢の世界（一版多色）：花や鳥，動物を中心に，自分が小さくなってその世界を探検するという設定で空想画を描く」。他に技法上の工夫として，紙版や木版をマーブリングした紙に刷るという例などが挙げられる。

C）は中学校に多く見られたテーマである。自画像や風景などを木版で表したり，ドライポイントで緻密な描写をさせるものである。写実的な表現を好む世代である中学生に適したテーマだといえる。

その他，版画を実用化させるテーマも小学校，中学校を問わず多く見られた。木版での年賀状やカレンダー作り，シルクスクリーンによるTシャツづくりなどがそれである。実生活に結びつくこれらのテーマは総じて子どもからの評判もよいようである。

(2)　東京都の公立小学校との比較

－東京都立教育研究所の調査をもとに－

この項では，東京都立教育研究所が昭和57年に，東京都内の公立小学校を対象に図画工作科の指導の実態を調査した資料をもとに，これまでに見てきた金沢市内の版画教育との比較を試みる。

a．版画指導の実施率について

＜表４＞は東京都公立小学校における昭和57年当時の版画教育の実施率である。学年を通してみてみると，実施率の平均は91.2%であり，１年で100%，３年で94.4%，６年で74.0%と学

〈表7〉東京都公立小学校における版画の題材の内容

	指導内容＼学年		1	2	3	4	5	6
版画	1	好きなものを自由につくる。	13.5%	20.3%	11.5%	6.3%	9.8%	6.6%
	2	対象を見ながらつくる	24.1	8.6	7.3	32.4	25.5	34.1
	3	見たことや経験したことを思い出してつくる	44.4	60.2	60.4	38.7	44.1	39.6
	4	物語を聞いたり読んでつくる	3.0	3.1	11.5	6.3	6.9	7.7
	5	空想や想像でつくる	12.8	6.3	7.3	10.8	9.8	7.7
	6	そ の 他	2.3	1.6	2.1	5.4	3.9	4.4

〔「図画工作科の指導内容の実態調査」東京都立教育研究所紀要p. 15より引用〕

〈資料3〉東京都公立小学校における描画の題材の内容

	指導内容＼学年		1	2	3	4	5	6
描画	1	好きなものを自由にかく	21.0%	12.0%	9.1%	3.7%	3.9%	1.7%
	2	対象を見ながらかく	14.8	15.8	32.9	44.1	55.0	59.7
	3	見たことや経験したことを思い出してかく	37.4	39.7	28.0	19.5	14.9	14.8
	4	物語を聞いたり読んでかく	12.7	17.4	12.6	15.5	9.8	9.8
	5	空想や想像をかく	12.6	12.1	16.7	15.8	14.7	12.3
	6	そ の 他	1.5	3.0	0.9	1.5	1.8	1.7

〔「図画工作科の指導内容の実態調査」東京都立教育研究所紀要p. 14より引用〕

年が進むにしたがって低くなっている。

＜表5＞は各分野の実施率の平均であるが，比較してみると，描画，デザイン，工作，彫塑と並び，版画も高い実施率を示している。

金沢市内の調査でも，97%もの教師が版画の授業を行ったここがあるという結果であったが，版画教育の浸透度の高さがここに裏付けられよう。

b．版教材における表現材料と表現技法の比較

＜表6＞では，小学校の版画の指導で取り扱われる材料，版種などが8項目にまとめられ，それぞれについて1年間に指導した回数が示されている。

全体を概観すると，1～3年では紙版，4～6年では木版が題材の大半を占めている。特に1年では紙版が93.8%，4年では木版が76.6%と高率を示している。

また3年からはわずかであるが，紙版，木版以外の多様な内容が扱われるようになり，6年では他の6種類の版全てが扱われ，その合計は44.7%を占めている。なかでも特に一版多色版の扱いが多くなり，6年で17.2%を占めている。またドライポイントも6年で11.5%とよく扱われている。

この資料には各分野の1年間に扱う題材の平均数も示されているが，それによれば1校当たりの版画の平均題材数は，4年1.2題材，5年1.2題材，6年1.2題材となっており，高学年では平均して年間1題材扱うのがやっとという状態である。多様な版種はあるものの，実際には版種を精選しなければならないという実態が浮かび上がってくる。

金沢市内の調査（＜表3＞それぞれの学年で取り上げた版種とその事例数　参照）と比較してみると，小学校1，2年で紙版が最も多く，3，4年からは木版が多くなる傾向と一致している。また3，4年あたりから他の版種も扱われだし，5，6年で一版多色版が増えているという点

〈表８〉版画教育に対する感想

プラスのイメージ	マイナスのイメージ	その他
・子どもたちがいつも喜んで取り組んでくれる ・白と黒の美しさが新鮮 ・印刷後の出来上がりの意外性に面白さや楽しさがある 《木版》 ・彫刻刀を使う喜びが味わえる ・絵画より技術的な差がでない ・中学時代に基本的な木版や版画の経験をさせることは絶対に必要である ・彫刻刀の勢いがでるので絵として面白い効果が得られる 《ステンシル》 ・出来上がりが面白い ・子どもが喜ぶ 《紙版》 ・いろいろな紙や布、紐を貼って面白さがでた ・いろいろな材料を使って楽しんだ ・失敗があまりなく、工作の楽しさと版画の楽しさの両方味わえる ・思いがけない線が表れ、子どもたちが喜んだ	・技術指導が多くなりがち ・もっといろいろとやってみたいが、扱いが面倒なものが多い ・制作中の作品の保存や、個人差への対応が大変 ・汚れる、面倒 《紙版》 ・立体感がでない ・細かくしすぎて失敗、貼る順の指導が難しい ・時間がかかる	・凹凸を写し取るという点で、版画教育と銘うたずに自由に取り入れている

も一致している。

学習指導要領や，子どもの発達段階などを考えれば，扱う版種の傾向は限定され，どちらも同じような傾向を示すに至ったのではないだろうか。

c．版教材におけるテーマの比較

版画の題材の内容（<表７>）は，描画の題材の内容（<資料３>）と比較しながら，その特徴を見ていく。

絵画（描画）と比較して特徴的な点は，「見たことや経験したことを思いだしてつくる」内容の項である。絵画（描画）では低学年でこの内容が最高の割合を占めているものの，３年生からは急激に「対象を見ながらかく」内容にとってかわっている。一方版画は全学年を通し，「見たことや経験したことを思いだしてつくる」内容が最高の割合を占めている。金沢市内の調査でも小学校の題材の内容に，遊んだことや楽しかった思い出を表現する「生活を表現する題材」が多く挙げられたが，この点と一致している。

また想像表現と観察表現という見方で比較してみると，版画のほうは観察表現が３年でわずかに7.3%，最高の６年でも34.1%と，絵画(描画）に較べ低い率を示している。

さらに絵画（描画）では「対象を見ながら描く」観察表現が学年推移で増加するのに対し，版画では，１年で24.1%のものが３年では7.3%と減少し，さらに６年で34.1%に増加するなど，必ずしも学年進行と関係していない。

金沢市内の調査結果でも，小学校での写生的な題材を扱った事例はあまり挙げられておらず，想像表現の多いことが版画の題材の特徴だと言えよう。

d．考察

今回のこの比較からでは，金沢市内の版画教育の独自の傾向をつかむまでには至らなかったが，版画教育のおおよその傾向をまとめることができる。

第１に図工科のなかで版画がよく行われてきたということ。第２に版種としては，低学年では紙版，高学年では木版が圧倒的によく行われているということ。第３に題材の傾向としては想像表現が多いということである。

これはこれまでに行われてきた版画教育の傾向である。では現在，版画教育はどのように行われ，また変化しつつあるのだろうか。次項では現在の版画教育について考察してみる。

(3)　版画教育の現状

ここまで調査を追ってきて，注意しなければならないのは，この結果が必ずしも現在の金沢市内の版画教育の傾向を示しているわけではないということである。挙げられた事例は，あくまでもこれまでに行われてきた版画教育の実践例であり，どの学年で，どのような実践が行わ

れてきたかの傾向を示しているにすぎない。同じ教師がその実践を現在も年間カリキュラムに位置づけ，続けて行っているかという問題は，この調査の結果からは判断できない。

そこで版画教育の現状を知る手掛かりとして，アンケートを依頼した際の反応や，設問＜4＞で版画教育について自由に感想を述べてもらったなかからの声をまとめてみた。

アンケートを行った際に，「最近はあまりやっていない。」「時間がかかる版画をやっている余裕がない。」という声が聞かれた。絵画や彫刻などとともに，図工，美術教育の中ではメジャーな題材であるはずの版画も，以前ほどは盛んに行われなくなってきているというのが現状らしい。＜表8＞の回答のなかでも，刷り上がりの意外性，新鮮さなど，版画の面白さを挙げる声が多かった一方，汚れる，扱いが面倒，時間がかかる，というマイナスイメージも大きかった。

もう1つ注目したいのは，その他の項の「凹凸を写し取るという点で，版画教育と銘うたずに自由に取り入れている」という回答に代表される版表現への新しい視点である。平成元年図画工作科指導要領の改訂のポイントの1つに，「『材料をもとにした造形遊び』の充実」が挙げられている。版画の分野にも，版画を従来の「絵としての版画」としてとらえるだけでなく，版の原点でもある「ものの形を写しとる」，造形遊び的な部分に注目する，新しい動きが生まれつつあるようだ。

＜表8＞の紙版の項には，様々な素材を併用するという，従来の紙版のイメージとは異なる回答があるが，ここにもその新しい動きのきざしがうかがえる。

これまでの版画教育の伝統的スタイルであった「絵としての紙版，木版」中心主義は，時間的な制約など様々な要因で，ここにきて行き詰まりを見せつつあるようだ。アンケートの際に上がった現場の教師の声は，このことを示していたのだと考えられる。しかし一方で，これまでのスタイルにとらわれない「造形遊び的版画」が小学校の現場を中心に生まれつつある。今回の調査でそれらの実践例がそれほど多く挙げられなかったのは，まだ新しい動きであるということと，なにより教師自身がそれを「版画」と意識せずに行っているということが考えられる。

いずれにせよこの動きが本当なら，現在の版画教育は「絵画としての紙版画，木版画中心主義」から，ものの形を写しとるという版の原点に立ち返った「造形遊び的版画教育」への転換期を迎えているのだと言えよう。

Ⅱ．提言ーこれからの版画教育

～「絵としての版画」から「造形遊び的版画」へ～

1．教材としての「版画」の姿

平成元年版，昭和53年版の2つの学習指導要領における版教材の位置づけ，金沢市内の小・中学校における版画指導の実態調査（1995）と，東京都公立小学校における調査（1984）との比較を通し，教材としての版画の姿が大まかではあるが見えてきた。その特徴を以下にまとめてみる。

まず学習指導要領では，教材の精選という意味で，版画については低学年では紙版，高学年では木版が中心に述べられているが，他の版種についての記述はほとんどない。

低学年では，「材料をもとにした造形遊び」としての版もとりいれられているが，これは昭和53年版によれば，「版画として取り扱うのではない」（P.28）のであり，版画とは平成元年版の4年生の項で位置づけられているように，「絵の表現形式の一つ」（P.73）なのである。

教育の現場ではこの学習指導要領の見方が当然反映されており，版画の指導は，「絵としての紙版・木版」により，身近な生活を表現したり，空想の世界を描かせるものが主流であった。

版画は絵画や彫塑などと同様に活発に行われてきた。しかし現在，この従来のスタイルの版画教育に陰りが見えてきている。紙版や木版が相変わらず主流ではあるものの，今の木版画にはかつて共同制作などで大作がつくられてきたころの勢いは見られない。版画教育はいま，大きな転換期を迎えつつある。

2．歴史的経緯から見る版画教育の問題点

これまでの，小・中学校における「絵としての紙版・木版中心主義」は，一般に「版画」と言えば木版画しか連想させないくらいに，版画のイメージを著しく限定させてしまった。ではそもそもなぜ版画教育の中心として，木版と紙版がすえられなくてはならなかったのか。そして今なぜそれが行き詰まってしまっているのか。版画が教材として学校に根づいた経緯をたどりながら，それらの原因を探ってみたい。

(1)　版画が教材となるまで

日本において版画，殊に木版画が行われてきた歴史は古いが，版画教育となると，それが一般に定着したのはようやく戦後になってからである。

子どもたちによる創作版画は，戦後の「生活綴方運動」の高まりのなかで，まず文集の表紙やカットとして誕生した。手作りの文集には必然的に複数性のある版画が必要だったわけである。そこには「炭鉱のぼた山」「養鶏場の飼育」といった，当時の生活の様子がありありと描かれており，子どもたちが自分たちの生活を自分自身の目と心でとらえて描いたそのような版画は，「生活版画」といわれる。

それらがやがて版画集として世の中にでるのが，昭和26年『暮しの手帳』に掲載された，山形県山元中学校（山びこ学校）の子どもたちの卒業記念版画集『炭焼物語』である。子どもの版画を初めて広く世間に紹介することとなったこの版画集は大きな反響を呼んだ。

これ以後子どもの版画は，文集の表紙，カットから離れて，造形教育としての独自の道を歩むことになる。学習指導要領に初めて版画の項が現れるようになったのは，昭和33年のことであった。

(2)　「生活版画」を踏襲する版画教育

版画が教材として根づいていく経緯をたどってみて見えてくることは，現在，版画教育の主流として行われている木版画が，歴史的な経緯そのままのパターンを踏襲しているということである。

木版画自体が版画教育の中心となったのは，なにより昔から馴染みの深いものであり，教材として取り入れやすかったということが考えられるが，それは教材となるときに，「生活版画」のスタイルをそのまま引き継いだ。すなわち，学校での版画教育は，始めから「生活版画」＝「絵としての版画」を指向していたのである。

平成元年版学習指導要領で版画を「絵の表現形式の１つ」（P.73）ととらえているのも，金沢市や東京都の実態調査のなかで版教材のテーマとして身近な生活を描くものが多く挙げられていたのも，この伝統的な「生活版画」の流れをそのまま受け継いでいたのだと考えられる。

(3)　魅力を失う「木版画」

版画教育が木版を中心とした「生活版画」のスタイルを今もなお変えずに踏襲しているのだとすれば，それが現在停滞気味である原因もつかめてくる。

なによりもまず時代の変化が挙げられるだろう。手作りの文集のため，カットや表紙に複数性のある版画が必要であった時代から一変し，現在は印刷技術が向上し，コピーが一般的に普及して，版画の持つ複数性はそれほど重要ではなくなった。

また「生活版画」が始まった終戦直後の時代に描かれた日常の題材は今はもう失なわれ，かわりに現在は欧米風の，あるいは近代化された従来の木版画に描かれてきたテーマには「そぐわない」風景が広がっている。

その他，色彩の氾濫という点も挙げられるだろう。カラフルな印刷物に囲まれた現在の生活のなかでは，白と黒のみの木版が常に魅力的に写るとは限らない。実態調査のなかで，木版のなかでも色彩豊かな多色版が良くとり入れられていたという結果が思いだされる。

もう１つ，木版自体の魅力という問題以前に，時間的な制約という点が挙げられよう。いうまでもなく木版は「下絵→彫り→刷り」というかなり手間のかかる工程を踏む。学校週５日制の導入や，美術の時間自体が削減されてしまった現在の美術教育の現場では，子どもたちにいろいろな教材の体験をさせるためには，１つの教材にそれほど時間をかけてはいられないのであ

る。これでは手間のかかる木版画が敬遠されるのも無理はないだろう。

(4)　「絵としての版画」というとらえ方の弊害

ここまで版画が教材として根づいていく経緯をたどりながら，版画教育の問題点をとらえ，版画教育が現在停滞している原因を探ってきた。ここでもう1つ大きな問題としてとり上げたいのが，「生活版画」に代表される「絵としての版画」というとらえ方である。

版の原点が本来，「ものの形を写しとる」点にあるにもかかわらず，学校教育のなかに教材としてとり入れられてきた版画は，「絵」として身近な生活を描写する「生活版画」であった。木版の持つ「素朴な」風合いは，当時の生活風景を描写するにはたしかに適していただろう。

しかし先にも述べたように，現代を取り巻く風景は大きく変化した。今あえて「木版」で生活風景を描写する必然性はあるのだろうか。そこには「本当に木版の効果を生かして表現したいものがあるから木版を」というよりは，「木版」を行うために，わざわざ「素朴」の匂いの残る生活風景を探してくるという本末転倒の危険性が見える。

どんな生活風景を描くかということが問題なのではない，身近な生活を描くことそのものが生活をあたたかく見つめなおす心を養うのだ，という考え方もあるだろう。たしかにそれは意義のあることだが，それだけなら絵画で行ったほうがはるかに手間はかからない。あえて「木版」にしなければならない理由はどこにもない。

「なぜそれを木版（版）で表現するのか。」ということをもう一度問い直さねばならない。「絵としての版画」ではなく，「絵ではない版画」，版画自身のアイデンティティーの確立である。

他の分野にはない「版」の独自性は，いうまでもなく「ものの形を写しとる」ことにある。これはなにも「はんこ遊び」だけを指すわけではなく，「木版画」でも同様である。

「木版」とは本来，素材である木につけられた彫刻刀の彫りあとを写しとる行為なのである。いや，なにも彫刻刀だけにこだわる必要はない。カッターのあとでもいいし，版木の持つ美しい木目や年輪をそのまま写しとったって良いのである。とにかく，木という素材でしか味わえない形を楽しむのである。そうして写しとったあとが自分のなかにある「何か」を，または外にある対象を表現するのにふさわしいと思われたときに，初めて「木版画」という形となってあらわれるのである。

平成元年版小学校『指導書』には「彫りあとの工夫をさせるようなことは児童にとっては高度である」（P.29）とあるが，この「彫りあと」への関心がまず先に立たないと，「絵としての版画」は成り立たないと考える。

彫刻刀で描くことは，鉛筆や筆で直接描くよりはるかに抵抗があるし，自由がきかない。版木に残される彫刻刀の，独特の効果を楽しむ経験を経ないで，まず「絵として」描くことが全面に押しだされてしまうと，版画を絵と同一視しすぎる余り，版画独自の効果は顧みられず，版画とは，絵のように細部にわたって対象を描写することだと思い込んでしまう。そこで版材の思いがけない抵抗感に出会い，「なぜこの絵を木版で表現しなければならないのか，絵で描いたほうがよほど上手くいくのに。」というような不満さえ生まれてきかねない。

「絵としての版画」以前に「版」とは「ものの形を写しとる」ことだという認識に立ち返らねば，版画の面白さは見えてこない。それがなければ，版画教育は「生活版画」のスタイルから抜けられないまま，停滞しつづけるしかないであろう。

3．版画教育の可能性

「ものの形を写しとる」版，すなわち「造形遊び的版画」という認識は，今のところわずかに小学校の低学年でのみ見られるようである。しかし今後，この認識が低学年のみならず，中学校も含めた，版画教育全体に広がることが必要と考える。すなわち，始めから版画を「絵」としてとらえるのではなく，様々な材質を写しとるという発想から，その偶然性の大きい要素を，やがては意図的に扱い具体的な表現につなげていくというやり方である。

こういった発想のもとでは，従来から行われ

てきた紙版，木版もまた違った様相を見せてくる。

たとえば紙版なら，質感の異なる紙や，紙以外の様々な素材を貼り合わせ，写しとるというようなことでも，表現の幅は随分と拡がってくる。また，様々な形に切り取った紙片をプレス機にのせ，空刷りするというようなことでも，手間をかけずに面白い作品が出来るだろう。

また木版においても，まず版木に彫刻刀で彫りあとをつけ，それで何を表現できそうかということから，具体的な作品に移るということも考えられるだろうし，彫刻刀の彫りあとのほか，版木の木目なども生かして抽象的な作品を作るということも可能であろう。そこには「古風」で「素朴」な従来までの木版のイメージはもはや見いだせないであろう。

その他，新しい版画として，ステンシルやシルクスクリーンなどが今後ますますとり入れられていくことが考えられる。色彩豊かなそれらの版画は，従来の版画の持つモノトーンのイメージを払拭させてくれることであろう。

版画は決して「過去の遺物」なのではない。様々な可能性を持つ，これからの分野なのである。

付記；本稿は今井が構成し，向が概要及びⅠ・Ⅱを，山田が「はじめに」を分担執筆した。

なお，本文中のアンケートに際し，多くの現場の先生方の御協力をいただいた。アンケートに協力して下さった方々をはじめ，現場の生の声を直接伝え，助言して下さった平野先生にこの場をかりて厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

(1) 文部省『小学校指導書図画工作編』日本文教出版，1979年
(2) 文部省『中学校指導書美術編』開隆堂出版，1978年
(3) 文部省『小学校指導書図画工作編』開隆堂出版，1989年
(4) 文部省『中学校指導書美術編』日本文教出版，1989年
(5) 山田一美「美術の学習指導要領に関する史的研究に向けて」大学美術教育学会誌，第22号，pp.295-304，1990年
(6) 鈴木吉彦，ほか「図画工作科の指導内容の実態調査」東京都立教育研究所紀要，pp.4-19，1984年
(7) 前島茂雄「日本教育版画協会」アートエデュケーション，vol.2，No.3，建帛社，pp.18-21，1991年
(8) 鹿島恵子「木版画による教材研究」北海道教育大学教育学部函館校卒業研究副論文，1994年
(9) 内田希「版画教育の史的展開に見る美術育の思潮－版画教育の独自性」『現代造形・美術教育の展望』，真鍋一男退官記念論集刊行会，pp.340-343，1992年